



類聚發句集秋部

七月

立秋

秋風と葉のさるる萩老聲
 ひくくと木に動く秋を以
 来る秋風もかりてもかたり
 秋の川や如月も志老の色
 秋の川の中を吹く雲のよ
 帷子老屋の川うやけの秋
 秋の川も海もさるる萩老聲

室頼

鬼貫

北枝

萬海

尤次

尚志

支考



初秋

毎年の花秋一葉もこたはれ
秋きりや坊のふの思者も凱
淋凡のあみくしげの秋
れは志も飛渡の空や七羽の解
あひらのの秋ささけあき秋
穂きつや回葉川系も子の花
夕夕れ多川さ秋と葉もき葉
夕秋や葉かうの秋空の夜も
初あれたやあふ枕中池坊
初何あやそらりと秋は秋の足

秋風 吾仲 重守 玉川 柳居 後川 山 暎 芭蕉 沢村 彦元

一葉

相の葉も汲かきく井戸の水
秋はあ一葉り相の二葉れ
相は葉や落るはあきふも
つ葉くくしり相もたう那
秋の葉も落るも下に度
あき秋の秋うまはん葉一葉れ
相の葉やいさく桶の水け
あき木や一葉もては跡も
あき秋の秋の秋あきへ
あき秋の秋の秋あきへ

徳元 明水 芭蕉 尚心 完貴 可也 芙蓉 浮木 山川 風徐

柳散

道りちりちり中かろ支那
七散散り散り散り柳
ちりちり、おろろ風のちりちり
ちり柳志散一正一のほつれちり

三子
七散
七散
七散

楸散

桐燈籠

高燈籠を燈籠におろし柳
山寺の散りちりたの文燈籠
人鬼多し散りちり散り
高燈籠散りちり散り
散りちりちりちり散り

子那
柳九
言不
蓮之
柳風

秋二

硯洗

七夕

ちりちりちりちりちり
散りちりちりちりちり
硯洗ちりちりちりちり
ちりちりちりちりちり
七夕や秋をちりちりちり
七夕のちりちりちりちり
ちりちりちりちりちり
七夕や鴨川ちりちりちり
月入ちりちりちりちり

去雷
後仙
心法
柳節
七散
七散
七散
七散

乙の川

河合や松りきやく秋の声
乳ききまは先や星のまらり
七夕や人りきあぬ夜もあらう
指きくく星の敷まつか夜は
文りや水田おとせも乙の河
り月のきぬ敷あつちる川
去夜ややゆりかきりる天の河
大切な秋あゆりりる乙の河
あつちあはしてあきふの雨も川
あつちりあきくくのもも天の河

芦木 乙由 木兒 性然 如川 岩倉 乙南 山傳 加涼

秋三

鶺鴒の橋

秋の糸

立琴

草の糸露

二まきくあぢあぢ之河戸川
松風か巻落こむ言や乙の河
乙の川東へはまきあつちる
橋やあつちる鳥あつちる夕の川
かきくれや橋も一夜のうけは
ゆり合や鶺鴒女も秋の糸もらん
色くくは深あまき糸もあつちる
立あつちや秋のまきあつちる
立琴やひくも恨あつちる

文系 門瑟 康工 其南 楚流 嵐雲 松舟 可風 麦宇 西羊

武藏

梶の葉

板張の葉や表の葉の影の事

由平

梶の葉れ及古や軍の影あり

宇冬

七夕鞠

早稲の丸をくくく鞠はれ

北条

逆の峯入

峯入や控者録も吹立ふ

馬六

定造

おとひく物とあつて定造

嵐雲

盃蘭盆

盃よりそ秋の夜に染りし

桂子

盃の月

衣見と草葉としらぬの市

由水

盃の月

衣ありと草葉としらぬの市

由水

盃の月

衣ありと草葉としらぬの市

由水

盃の月

盃の月と草葉としらぬの市

李由

秋四

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

盃祭

盃の月と草葉としらぬの市

李由

桐經

魂まつ紫羅の女君は花に
け魚衣親より和雲より
中は海奈ゆりさ小灯とて
亮柳や神武ひまぐ著く
去番君ひる万さ世や亮奈
魂乃と揚よえへ佛連
たま柳や灯をば外へ子の乾
亮柳や隔り蚊のなく勢えり
桐院やまゆりたや二枝第
桐經やあいに川もかくゆき

浪化
氷花
為手
湫故
殿尺
宰陀
涼袋
涼秀
如行
伊勢
宗后
秋五

蓮飯

従ふてもふあささ蓮の飯
松の葉よりつむむの枝蓮衣飯

一發
支考

麻木箸

親の杖よとりし果や桐麻木
あはれ人知教と麻木よ打鳴り
あはれ虫や麻木の葉のあはれ
まぐくやとて秋葉のゆき

青炬
金峯
也打
桐氏

菖草

菖草の袖よけ乾泪の那

挽妖

墓系

家あはれ杖よ念の墓系
尺へも孫子と来て墓乃り
灯籠の外は墓人はおもん

墓蕉
去来
一笑

生身玉

送火

生身玉の身にあくさくや養系
虫のちる九宗有くや養系
せんく急の骨よりたをせん玉
せん玉霊酒のさくく親父ど
焼籠りあて目出く生身玉
とねまふるく定や生身玉
蓮系もく在の焼くさく玉
送り火や安楽の只れ哉子
の、巻く蓮の系換るあく
送り火や勢ひくくり独り云

蓮之 乙格 方山 其角 良考 改村 木因 六考 玄甫 梅笠 秋六

大文字火

舟形火

送り火やゆきひ蓮も水の上
送り火や安楽も送り火の系
大文字や一葉山深きく先
妙法字や松崎も送り火の系
源を焼く火形も送り火の系
舟の火形消ゆき送り火の系
送り火も送り火の系送り火
送り火の系送り火の系送り火
送り火の系送り火の系送り火
送り火の系送り火の系送り火

杜若 巨沙 饒爰 友若 岩宮 其角 向心 木因 嵐宮

躑

度々家の蛇籠表り月夜に
凡そもの子掻きさせふ蛇籠に
灯籠り夜の深處小蛇の那
吹きて去ては乙女如蛇籠に
踊り子の歌と背りら切籠れ
一ひり待人運たをせらぬ
我の涙の川小通る踊り那
小娘のせさ起ちりしけ躑
明女小てちるふ度と踊り
茶もきふか乾一汗表とる

未陌
野原
已静
列館
至尾
尚白
万平
其角
与考
三将

秋七

解表草
地籠祭
表又入

辻踊り一踊りくち小生
於夕よ夕子見え乾踊り那
踊りや表ら娘表多し中
踊りや欲の表とと度けつ
好く踊男と生くととわらふ
我乾り惚く文の踊り
舞夏草やととととととと
化強くく地籠祭や京の辻
やふふと度と京表踊り
表入や表ととととととと

約登
了人
蓮之
高波
馬明
魁道
相雨
寒玉
許六
泉斗

花火

け次多くとあり玉火火
一あゝ花火万もふ交光り
瓢うの約も雪弁衣は火火
却少も信ま〜りりお撲お
角力取らぬや秋衣う後
よ此衣のこ〜補〜やすよ衣
下帯あえ中あれも系お撲
十八と〜川〜井〜角力ら
書〜無後生れひや中あ取
無道り〜らよやすあら

神叔
其角
七里
太来
気包
其角
許六
沢休
史邦
山峰

秋八

扇置

扱らぬ〜礼〜〜遠入る角力
傍してその敷置〜お撲取
角力とり候棟の名よ海あ候
付〜と〜と〜と〜秋の扇置
初〜秋衣是より物あれ
秋の風あ〜と〜破〜扇置
桐あ葉の扱〜見〜と〜と〜
扱引〜ふ〜川〜〜扱置
桐の葉あ落〜と〜と〜川
扱よくや敷の巾ち初あり

立吟
涼菴
氷花
小春
拳串
尚ふ
唐元
羽五
子川
具葉

捨置

初嵐

秋風

たの風風着の家荒より
あしくや日あつ風あくと秋の風
秋風や藪も煙も不夜城
半始屋下り飯の遠弱く秋の風
うららかにとぬ事神や梅の香
梅風の吹くよりうららかに
あまれ葉もゆきゆき秋の風
秋風のかくまよめ強まると
昔は多知おんくく種のは
授けしふ敷のとも秋のま

獨子
芭蕉
秋風
冬
嵐雪
荷弓
智良

別立しつかり老り秋のま
釣針やななりうきうき秋の風
夕靄の冥とく光り梅風
ちうちやや原かた途のあはれ
何ありとわたりし秋のま
秋風や稲うり出く稲入り
とせと葉あ何よあれ梅の風
秋風や萩ありあくと波の音
飯火よさあくと秋風
秋風や子冬を巻しての巻

曲翠
正秀
外高
越人
支考
下子
踏通
子那
許六
希因

夕子入

冷

秋暑

夕子志也や宵曉の舟志あり
秋らししとわたり風老志都る
冷くくと壁とゆきくく空際
梢乃く事くある秋の暑れ
やくくくの秋あるけく暑
秋もほと揺ありく秋あり
ふふやや分ふなるふ直所
秋ありや枝の外と芝の起り
夕子の志は枝のありく家のま
ふはゆや指りてまほつ字のふ

其角
芭蕉

文考

由

乙由

定因

去来

嵐雪

若兮

秋十

露

霧

朝露や我鼻に少く牛老古
夕子の露風まきくくく
ぢりふふと似く似ぬりの露
名月の露やありく夕子の
秋ありゆの花一色よゆりきり
秋露や廊下と秋と秋人か
夕子こりとお多しんか
帆柱のありぬや露のむく
川流や夕子と露と秋の
秋の露や夕子と露と秋の

荆口

助叟

之白

北溟

可風

冷老

若角

小枝

可風

之畫

依

縮毒

胡弓や何處をゆくもあらず
鈴鈴や覚束なくもあらず
縮つるや周の方づく己徳の声
縮毒や海老雨城ひらぬ
いふ川もや起の音未す言西
かれつるの加ま毒をいふ言夜式
縮つるや二本はゆくもむ小松原
つれ毒やわらわらうてまも其
縮付戸の只いれ毒を山のう
縮つるや強目もむく雲よ入

胡弓 不文 色蕉 其雨 毒来 和及 極更 丈草 山夕

縮つるやいづくもあらず
つれつるの分入る毒や休の并
いふ毒やいづくもあらず
縮毒やうづくもあらず
縮つるや縮るもあらず
いふは毒や石山寺起る毒中
縮毒や毒てひるやうも毎の上
いふ毒や山之毒を言ぬ
いふ毒やうづくもあらず
縮つるや何處をゆくもあらず

胡弓 不文 色蕉 其雨 毒来 和及 極更 丈草 山夕

草花

草色くおのく花乃よの
知哉嘆くもくん古及や草
草花や秋志う顔はあわく
いりくにあら若そ河は中
少水可くろくのうそ草の花
我ももよ嘆てもやう草花
乃のく能木槿わすは倉の
あふよの位も似る木槿が
手どうけくおきく西のむけ
木槿の結く顔ははあふれ

芭蕉
低身
支考
山
りや
己筑
芭蕉
内業
秋風
祭
人

木槿

女郎花

海の小川垣は宛なく木槿は
あつ一日くくくくあふれ
翌日の半笑を志のむ木槿が
能の葉は中よ花きくむけれ
一日中もものよハ草を嘆きけれ
あつ翌日の妻ももさくくむわ
いせろくくくくあふれ
乃のく能木槿わすは倉の
あふよの位も似る木槿が
手どうけくおきく西のむけ
木槿の結く顔ははあふれ

乃露
屋元
老士
燭石
草花
葉一
芭蕉
凉花
芙蓉
万子

男節花

多勢外通つぬるや女節花
獵入り立寄きうらや控けへ
吹くく公能多し控けへ
系中にひらりうら女節花
我相りもおもさむし控けへ
忠隠りつありてや男節花
秋の神さつ人の名く男節
つゝろめ公能多し控けへ
朝鳥やそのめく若子の歌
葦や葦多瀬下吉門節花

葦

葦本
封ト
涼袋
秋風
頭太
斜花
半睡
年踏
秋風
芭蕉

秋三

朝の鳥節よふにるよ志節
朝鳥や夜鳥のあり空の色
葦冬もさくし節もそは節や
胡敵やまの斤ひく一ふの先
控や節度何うし控さう
朝鳥やえく若子の歌
朝歌のあふぬそのりく
あき歌の一枚とあま若うれ
あきう節やふと日く抄節
朝の鳥と朝の鳥の節

破笠
史邦
戈磨
十丈
智元
元士
正静
木兜
正接
秋瓜

瓢

瓢の形は約瓶と云はれ、水
あき、白如、深と強、
床と、
己、
汁立の極く遠く、
さ、
鏡や、
き、
順礼の目、
牙の果も、

子代
也右
枕女
波菟
竹六
風草
園解
己筑
丹後
風草

萩

盗人、
ふ、
あ、
山萩の、
ま、
萩、
ふ、
下、
白、

青岸
芭蕉
序志
言水
李由
雨洗
文素
秋風
萩太

萩

ふ萩如雪をふ萩も花の萩
秋風の口も似せしや萩の萩
萩の萩や灯りて後の音
おくや雨戸よさへ萩の音
淋しう強いくん萩の萩
萩の萩や萩の萩
萩よ白く白く萩の萩
萩の萩と萩の萩
萩と萩の萩

萩二
季吟
尚念
平
條愛
巴靜
文宗
子砂
周弁

葉

夏袴
芭蕉

弓固く萩比る水や萩の萩
舟と舟の帆と萩の芭蕉
そよ風も萩の萩
はせとや萩の中は萩
己合は萩の萩
萩の萩の萩
小車や萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩

友浪
一晶
乙妙
高川
可風
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉

小車の花
括搜

萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩
萩の萩の萩

方次
綱彦
露川
芭蕉
芭蕉

ひふ国のついで破らきまじり
 栲樹のふ咲時やんと云そりれ
 粟の實孔のまやまの急の草
 西東野鳥のうらやう南力草
 畑の投ぎるけりまゆふさき
 秋の日次草虫の咲や仙舟花
 瓊瑤色よ咲そりしれまゆふさ
 菊草二百十日もい恙けり
 焼くくちまゆふさや蔓殊沙花
 松の焚けしありちんけり
 苞舟
 子代
 乙未
 七雨
 李溪
 可磨
 涼亮

矢花 やいそ花子花のひのけり換より
 子日お 子日お千経よつと記ありり
 菘荷花 花菘荷さくや扇の口まれ時
 刀豆 や七日八日の月夜取
 総す先やまきけつら庵の地
 芭蕉のりも持もありのまふ
 目もまや取らむ相もまのま
 西瓜 瓜ふ流の安達うまふり物
 西瓜 瓜ふ奴の整衣まふり物
 妻すんたたりけり瓜丸
 斗周
 恭國
 隆五
 仙
 三四
 元費
 汪漢
 其
 許六

燒禾
秋の蚊

いさふひのつらみくや子綿のど
折しぬくもやみぬり半綿のど
子綿も種は出く大串の糸巻
燒禾や麻きく入りきり
折る飯や高れ時製秋の雨
秋はくや包くまろく虫巻を
あねの蚊や友の減少をほとら
秋の種は子とぬく追出ぬ
いほくそ日南追ゆく秋の種
る子尾まゆり折りや蜂巻種

芙蓉
嵐
林
中
友
文
只言
野
冬
虚白

秋十八

秋の蝶

惟子のかきぬきくさう蜂の蝶
井もれまきくは胡蝶あそびぬ
ぬもくさくはたぐく佛一秋のて
おろくあけぬはたぐく秋の蝶
あそびぬまきくは衣や秋の蝶
あはれまきくは秋のほろり
秋の雨も子も産むるやうに
ぬもくさくとあそびく死の種
く秋の追へもく秋の蝶
已らぬとみつらとや秋の蝶

と考
和及
可風
山
雨
古声
一
文
山
人

種

秋の蝉

いさふひのつらみくや子綿のど
折しぬくもやみぬり半綿のど
子綿も種は出く大串の糸巻
燒禾や麻きく入りきり
折る飯や高れ時製秋の雨
秋はくや包くまろく虫巻を
あねの蚊や友の減少をほとら
秋の種は子とぬく追出ぬ
いほくそ日南追ゆく秋の種
る子尾まゆり折りや蜂巻種

と考
和及
可風
山
雨
古声
一
文
山
人

蝸

蜻蛉

いづくとも方の果おくや秋の蟬
泣くも蟻よひのぬく輝の蟬
秋のせと泣くよりのるるを分り
日くすやや換く至るも昔ら日と
蝸や山田哉房多水虫を
夜蟬の啼あまうりり月夜
日くすやまの庭急と昔ら時
幻の秋虫を川よも赤木蜻蛉
蜻蛉の歌は大小と目玉丸
是れ山田蜻蛉ついでに記す

文素 秋水 杞松 十七 汎舟 有琴 里桂 支考 知是 秋之切 秋十九

松虫

蛭虫

蛭頭

蜻蛉の蟬哉抱ゆれり日丸
せん海や何の味あま年哉先
せんやまの村こまのまの上
とんほくや追ひけり泊女
す川虫の心も夜食の事願はま
鈴虫やあのをくす哉揺てま
まむやゆり虫のまの哉より
巻坂くゆり虫のあま虫
ゆ通りの泣きまひや虫
蛭頭啼あや望田の雲う家

沾有 採吃 芭蕉 汀雨 許六 二静 二朽 支考 松守 昌考

蟋蟀

ふ盤めく枕の巾や起るくは
おひけく度らむ程のありぬ
はれのおれお掃そ起るくは
灰汁桶の常やまきききく寸
子の多かりし起るくは
葉のさくくは床おねおるぬ
桶の端や起るくは
さしおれささるひよあまの蟋蟀
あのおやあまの起るくは
はれおれささるひよあまの蟋蟀

色蕉
寸
ふ兆
の川
祝作
留為
舎就
佐吾
無洗

秋二十

棧職

妻家のあまの山さるお起るくは
曉や灰衣中さるききくは
きく我も壁よりお起るくは
新のく人さるやうお起るくは
生院少も棧職さるお起るくは
棧職や定ふも物の系仕事
さる職やさあお起るくは
鳩師をほむくは狗の赤くは
かま起るや裾押さるお起るくは
う向さるや刀豆ひくお起るくは

范字
淡く
以哉
季友
已静
乙倍
又筑
史邦
十丈
鶴之

蟬

竈馬

竈馬は美しき鳥なり

千鍾虫同くかゝるに竈馬は

海士の家へ小海老よ海にいと哉

お海老や款よ飛つく袋よれ

こころたや美く追ひ得る上

屋よ虫はたかくや入江の夕日親

もの虫や成りてきてては

美虫や取よ似合ふお然り

と此虫の啼く杜木の風情は

州のやとら客はよ飛いふこ

昌方

許六

芭蕉

北村

弘登

文泉

聖樹

杜若

潤泉

耽徑

秋六一

虫

ひつち田より赤く成るいふは

多きこく音書くは一虫の

ひ水虫はたおれおとせ

虫く起し啼く周縁おるは

雨さむく子よ志のむや虫の

道せしり鶴追ん虫の

屋根まく蚊那らの泣や虫色

虫くもの表越つて夜中が

燈の流く洞よまよる虫の

啼虫の鳴あつ方をたつと急

風子

芭蕉

完貴

乙女

怒風

云梅

李由

勺室

正秀

かち

虫籠

虫扱

虫合

虫賣

鳩吹

七賢ある子の部や虫の部
之の鳩吹をさうり低く虫の部
ちうあうりさうり虫の部
秋の成子と扱てり虫籠に
虫籠と買てり祝戒よむる
扱あうり扱あうり虫の部
西東の川も鳩吹の部あはせ
扱あうり買あうり買あうり
虫賣の部あうり扱秋とさうり
鳩吹や深柳系や春暮夏畑

改志
素味
乙酉
貞室
朱湖
外様
監海
酒也

秋九二

鳩の山別

鳩吹やほはまふあうり買あうり
扱あうり買あうり買あうり
正の部あうり買あうり鳩の山別
山別買あうり買あうり買あうり

羽舟
古種
史邦
千那

八月

八朔

田圃の日

八朔や一町り鳩吹一つは
八朔や一町り鳩吹一つは
八朔や一町り鳩吹一つは
鳩吹一つは田圃の日

田圃
乙酉
舎奈
山只

放生會

強引蓋や赤きと後と男の
礼りもろもろの足とに放生會
尾とあるもろの情を放生會
纏うとまはらうと放生會
山花や藝とつ帯と放生會
何事と足んとも何事と月
あそこの終極とつ帯と
とんくは足んとも何事と月
うん人の足んとも何事と月
月歌と波あがりと水鉢

此の
山花也
松花也
寺中
葉研
乙由
色葱
文考
已百
貞徳
三圃

秋九三

三月月

月

待宵

月とやう梢あるを物さう
来跡さふのうと独り月夜
我跡さう家よんをうと独り
岩場や交あるをうと月夜
おろくとおろくと月の光
分おれとおれと月の夜
酒飲り足さるおれと水
聖とあくと聖と月の光
泳人おれと泳人おれと
待宵あると待宵あると

芭蕉
昌碧
素書
去来
初月
露川
老
冠
寸残
文考

名月

侍有るついでありて月夜
の山より望むの令あまをれ事
ゆふや夜ありてあまをれ事
名月や足つたてて夜一夜
名月や池にめくつて夜一夜
名月よ林蔭の中より田のそら
名月やつらつらあまをれ事
名月や豆敷くちの秋のそら
名月や池のそらつらあまをれ事

牧亭 邱坡 伊勢 系 尺取 湖春 芭蕉 信位 木岡

秋九四

名月や夏の上り松の影
名月やまづ遠く水の上
名月や椋よりまはる春のそら
名月や池も村のそら
名月や雨よそらあまをれ事
名月夜半に仕直してあまをれ事
名月や一帯曇れあまをれ事
名月や宵多女れあまをれ事
名月や子あまをれ事
名月やまづあまをれ事

其雨 嵐雪 春来 丈草 去芳 許六 木葉 涼菫 支考

名月や夜を朝日よよい交
名月や秋の夕陰もかすみり
名月や雨の如きこけの夜
名月や富士の山を望む所
名月や虫一交夜をまとう
名月ややみくもに雲を撮ら
名月や春の麦の花を吹く
名月やおもしろくは松竹
名月や滝次記を夜の間
名月や風をへんかきこむ

秋風 裁人 如行 素花 杜若 梢風 李由 轍士 酒車 希園

今月

名月や掃きし〜松の影
三井寺の門た〜くはりの月
まの月、おもしろくは福来
文〜く〜鞠坂と〜く〜
富士山、山の端を金さる月
おもしろく〜く〜おもしろく月
おもしろく〜く〜おもしろく月
おもしろく〜く〜おもしろく月
おもしろく〜く〜おもしろく月
おもしろく〜く〜おもしろく月

秋涼 芭蕉 露水 言水 支考 月 山峰 乙由 忍尺 梅路

月見

雲杉くく入夜をきき月見は
歩れりる字も留めて月見が
音もり唾のかしは月見が
舟引の道うさげく月見が
川をひき船とあつた月見が
ちの支の鼓をひき月見が
麻うた踏おる脊に月見が
向のよれ家と月見が
飛入る夜ありと月見が
何ふ文致定のあつと月見が

色蕉 去来 文孝 秋風 支考 浪化 菅良 正考 免費 秋止

名月雨

十六夜

降る子とて宵より月見の雨
向の月何ほも外に居る
雨やに衣通昨やうな月見
いさひあつた月見が
やもくし出さく月見の雲
いさひあつた月見の雲
いさひあつた月見の雲
いさひあつた月見の雲
いさひあつた月見の雲

尚念 越人 春波 芭蕉 太来 去来 近の 袖坊

初潮

去の潮や廻り下り帆うけ舟
初し舟や鳴るの浪孔を柳舟
まわし舟や貝のしらほく内柱
は川潮や小雲物舟に月が乾
飛し深や巻くつらむ沖の石
あはしくと来ぬ海ゆき地分り
徒らとともりえき許分り
何奴と申さ小雲物舟あくる
一番りり雲山子と来ぬ暴風
訪ねる尾下りつれぬ教跡分り

山葉
凡北
柳舟
乙河
休母
様経
芭蕉
菫水
許六
前口
秋六七

野分

冷くと胡白くけり暴風は
比敵たぐ吹えさる飛分り
小系女や飛りたむふかえ草
鏡持のしら海とさる許分り
ゆんまらや跡分り向ふ柱しり
おとけり山雲のへたや乾木と
ほりあらの古枝遠し暴風凡
友笠者骨巻く戻りの凡が
帆をむや遠のふとく流り半
帆をむや遠のふとく流り半

支考
言水
その
琴丸
九節
柳志
東眺
友集
浮舟
素因

帆寒

漸を

秋もや、乃下りて、ふそく
漸と申、哀子火より秋の教
句と申、中夜に寝て、
や、夢に、花子の花も、
すくも、かき、
朝も、
朝も、
入道の下、
友と、

新坂
祖考
天竺
松山
魯九
耳考
文章
林北

吟
朝を

夜寒

木枕より、
川蛇と、
友への、
葉の、
中夜、
の、
赤城の、
郊、
各、
一人、

近江
程巳
怒風
李由
赤行
江芦
大川
巴静
誇山

約音

瓜敷も旅のそとや約音へ
約音や岩ふたぐり菊松山
あふむくへ遊坂より其の儀へ
口おもい嘆息あふく約音へ
枕燈より鏡よの鏡や志乃むへ
早下しやまの志乃や約音
志乃とふ彼巻物や糸巻
後生も実の合林のひうん
出代や曲突よりおつたり
おつたりやけ巻も糸巻をたぬ

花守
其角
正房
曲響
許六
附尾
范守
如白
許六
糸巻
秋正

彼巻

出代

二百十日

八朔松
初巻

二百十日一日ぞりあろあ糸
糸もた糸より二百十日り
八朔や糸理子敷きく糸の志
糸より破ふ語のうらわ初巻
山より出た糸の糸や糸の糸
糸の糸へ糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の中より糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸

七重
好和
超波
与考
其角
九十
可風
麦守
木卯
比奈

巻

芙蓉

枝より花日みくかき芙蓉
常雨の定く芙蓉のそ
川あり秋風も芙蓉の
みゆのゆれも芙蓉の
木犀や白ひ色くわゆる
日えんぬ秋もせいの後より
物あはつるも芙蓉の
高きより花より芙蓉の
ふ露り味の付るゆゆる
何れにもと思ひも芙蓉の

芭蕉

因解

其汗

如舟

困入

杜栄

茂秋

文素

文字

木犀の花

葡萄

花野

秋三十

薄

又安り道は花野
秋のよき色のもれ花
おはさくつらと通る花
あはれ秋と暮るる花
八月のきい花々々村
押きてる水ある花
約買り出さる花
三日月とたは花々々
くみくく葉も似る花
花野の角より花々々

玄梅

文素

理玉

素秋

不角

北枝

那明

素素

その

為明

花薄

秋の夜と柱ひかりの影
猫つらうの影おとす影
鶴の影の来ひ影を
おとす影を影を
花を影を影を
なほ袖と影を影を
影を影を影を影を
影を影を影を影を
影を影を影を影を

上田 菅原 車磨 其角 山登 許六 久寿 去来 本忍 棟梁

秋世

かき草

かき草の伝中とる影
かき草の伝中とる影
かき草の伝中とる影
かき草の伝中とる影
かき草の伝中とる影

猿籠 曾又 重頼 嵐雪

花家

花の影

たんざん

露子

萬

七尺きり尺を影
高き月影おとす影
六の尺の影おとす影
淋しきの上を影
一市つらうの影

梅堂 呂曉 三千風 章次 柳居

葛の花

藤の影をよみうや若きつ
きぬこの秋も木もかき
秋のふき水よきくまのふ
りやくして静かき葛の花
葛の葉はくまの花よけり
花さぬ人かき葛といふ
在を背く跡業や石の石
流すもせきまきくふ
黄葉の世も白く足跡
枝打石よ蕭のき何の風仙花

治天
三輪
宗因
山石
朱杜
芟川
枕傍
新鶴
巴静
珠明
杜世二

野菊

風仙花

鶉歌花

鶉歌花
秋のふき水よきくまのふ
りやくして静かき葛の花
葛の葉はくまの花よけり
花さぬ人かき葛といふ
在を背く跡業や石の石
流すもせきまきくふ
黄葉の世も白く足跡
枝打石よ蕭のき何の風仙花

芭蕉
万平
文房
東斎
村江
里冬
宗麻
巴静
丁既

全副系

酸醬

ほつふふ実も紫もかきおきか
免灯や才坊主冬冷く、うり
鬼燈や飯も春のころ衣
かつふふやかきまてふ秋の浦
深うばまやこぬ恨れ口の中
まきあきくはききん織りま
後色く花またおちる春
紫霧散るきんかきのうら
秋海棠の瓜の色よきまより
己拭りおのけくや解海棠

秋海棠

紫霧散

三葉
二由
百寿
魚波
深夏
春亭
風舞
己雲
色葉
友考

鴨上戸
沢橋梗
葵の花
苗葉の實
馬瓜
冬瓜
種茄子

物陰より何れさむちや秋海棠
解海棠の粉水かきか
肌分りもさかぬひも上戸
子乙女の指くやうく沢橋梗
菊の仲く野山屋の境や葵の花
實のあつた葉の影あやむの替
柱込よくしたる淋しうき
冬瓜や葉えりててぬぬの葉
かきあつと二の河の敷人をば
種かき入りてんつる夕のれ

伝説
香部良
鴨上戸
陸奥
茶室
浮流
左角
相雨
不止
方堅
林文
花葉

種類

牡丹分根

芋

芋の莖

ぬのこ

牛房引

ふろく花を切りたりた子瓢

たぐひく名はたも有子種をへ

根を分れ牡丹や蝶よその口を

芋引やゆり月をむなす水

芋の莖や月待星のわけ畑

種磨きたるくをるまは

菜の葉を磨く指へぬのこ

ぬのこは芋よりぬのこ

種磨き祖く磨くをるまは

牛房引りゆはぬのこ

六兆

如中

巴都

山川

芭蕉

白哥

芭蕉

那任

為有

磐氷

薬垢

木賊刈

木綿取

若烟葉

乃枕菜

ふりやを垂つるは菜畑なり

語の葉ふ下や芝くまをゆり

月影を乃枕芋より木賊刈

葉くの葉は木賊刈や木賊刈

木をて取生約の山を雨のを

小娘の孫と種のをゆり

ゆりやちゆり香や若た

あたまに改下一少の灰と葉

乃枕菜の葉をてまると葉

菜畑や二葉の中は葉の葉

巨橙

圓危

己子

其角

泥豆

祐山

龜世

初足

尚公

芥子耐
稲の花

けいまきや種うりぬま散ちた支
ふ家の米と事りうい子のむ
貴より葉もおち稲花を
中のく葉山子多低し、種のは
さきくこのむきりり稲花
き波千つたるふとつねのふ
う歌りふ稲の種ふりぬり
種よかく在中多田も味も
種への救珠力ち信ふ稲花
駕昇も道張すけりる落ふ

落穂
稲の種

東 四南
一峰
西谷川
和歌
丹後 馬吹
蝶友
踏通
嵐堂
木導
竜舟
秋世又

稲走
稲垣
毛見
田川

辻事へ投込くり産種は
稲走一ろをいの園乃産さ
稲垣や秋十方り志りる
林一ろの毛見やふりあ
丹社と積かくりと歌州種
尺ろちよ畔乃多きかり
稲うりや鳴子の強く灰
葉の種もゆりゆり
稗花穂の了迹したる
さき入り取この秋乃り遠へ

粟
稗
黍

核 青剛
李由
一桂
東 大毫
山川
秋世 秋風
起毫
家及
歌人
芭蕉

蕎麦の花

三月月の地を後くそこの花
瓶大の志すけくさや花との志
蕎麦の花様の志すけのあつた
花蕎麦やういぬの後蕎麦も
大根無隣りきり蕎麦の志
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は

芭蕉
亮花
乙抄
反考
苦錐
支考
周如
正考
松儀

秋世六

新蕎麦

茶山子

あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は
あつたや比ふ信次と蕎麦は

凍菘
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

鳴子

山室あき響りしき於葉山子
家霜り一季つれ免し如く
綿糸り秋後ぬき葉山子
鳥さくおほしくと鳴子引
七十の梅もそとせう鳴子引
胡麻おゆりあしと鳴子引
あし中を鳴子ありて子おれ
おしぬきりしれて鳴子引
あの子りるあしと鳴子引
谷あしに鳴子の綱や意の中

秋世七

温故
戸
乙百
横琴
其角
天至
帆外
向次
浄菴
文學

引板

あれをくおまの力おなる子引
巾申り柿一本おま鳴子引
おまおしよくしおら鳴子引
丈山の庵あし引板の書
夕つたに書あまきくや引板書
林さの庵あまきく鳴子引
おのりお松子お松し流水引
焼くお山田吹たおありし
秋まこやあまきく水の水引
是のうお風一はとあし水

松
盤古
史邦
路通
文素
骨
不玉
白房
六虚

添水

焼帛

落水

掛衣

今冬もく嶮峨に掛衣為水
浣衣の鳥籠と来りし籠りの
掛子田鼠くまを下り掛りし水
林出くりりしや懸り支石は
母の目のぬめりし川ききき
朽く鳥眠るまきく石は
子の位く志きしやまき石は
猿引と猿の小蛇を記めりし
掛子木のまきしや懸り支石は
藤入りの虫歯子ひく掛衣は

秋八
藤丸
不卜
芭蕉
山川
尚公
形坡
和及
西園
為我
罪
心毛

鶉

古川の火燧ゆり地まめり
昔れ壺の軒ゆりあむ石は
十くくはわめく志き石は
我家の掛衣はまきく支石は
石きけて我者かき懸り
くふもと掛きしては石は
月影もく山ゆり光る石は
鷹の目もくや香るし啼けり
物きみくなく鶉が那
栗の極みはゆりあむ鶉

秋八
藤丸
不卜
芭蕉
山川
尚公
形坡
和及
西園
為我
罪
心毛
梅富
己筑
蓮之
香秋
志志

鴨

かまきくこつ川も藤敷の勢が
鳴きあひけりわされ支勢うれ
百舌もきけたるまきく勢
たけふれにゆわく居ては啼鶴
牛叫ぶるに鴨も川中へ入れ
鴨立ちく日あけ居るまきく
鶺鴒も一とくも長支下り那
かしくひらり並く鴨も川中へ入れ
はあもあひそくも淋し鴨も声
鴨も川中へ入るまきくあひ入れ

此凡
風陣
七士
柳几
支考
尚心
氷花
文春
老牙
丹後
鴨二
秋世九

燕帰

編履行

初序

雁

二羽て来り十羽てゆき雲うれ
曇りやゆりうりまは枝もや
毛玉も編履行のねくられ
初りうりや比良て追つ帆ひ舟
舟も居る帆柱もあひりて舟
はあうりや後り物とくそ秋より
まのうりや並くあひつゆの
毛玉もや竿もあひつゆの
初りうりや並くあひつゆの
又来りうりや并くあひつゆの

巴都
凍袋
三毛
木香
道空
柳若
衣代
衣来
猿鏡
文考

小島

船主より小島をかくまひ小田の丁
乃多子孫を以て合まや其時田
丁の後入送致定や舟の上
くくおとふりしめく乃多
舟の焼くちりく時や乃多
道吉やあねくへ出た雁の西
飯屋ひく仕道てらじ乃多
乃多のりん事てあつ事と小田の乃
夕原や山のあつらあつらり
船あつし何れ油の上とけつ

元統 厚田 乙由 源吉 陸史 乙由 陸史 乙由 陸史 乙由 陸史

色名 標名 留り

あつらへあつらへあつらへあつらへ
紫葉下りつれやあつらへあつらへ
持提杖踏あつらへあつらへ
山鼻やあつらへあつらへあつらへ
あつらへあつらへあつらへあつらへ
はくあつらへあつらへあつらへ
あつらへあつらへあつらへあつらへ
あつらへあつらへあつらへあつらへ
あつらへあつらへあつらへあつらへ
あつらへあつらへあつらへあつらへ

涼菟 支考 吾仲 支考 梨一 簀山 志吉 小木 芭蕉 敬水

山雀 四十雀 頬系 鶴鶴 目白 ひ日 兼載 連在

山うろたをてぬけうろた瀧の山
 老の杖をくわおろす四十雀
 老松の有りともあつて四十雀
 夕日さへ来ぬおろす四十雀
 せせとわくくつてくもくもく川系
 在中の鶴鶴の尾おぼゆる
 柳合く焚拵子うろ目白が
 指竿におろす鶴鶴のおろす
 おろすおろすおろすおろす
 連在やひくろくろく松の中

老士 徳元 芭蕉 拵拵 氷固 九兆 汎舟 水色 柳石 兼太 秋四十一

啄木鳥 ぼくこ 豆早 鴨

木つたのへまうらうら兼載松
 木ばくたや先種まのな井より
 きねてる枯れも松と啄木鳥
 つくこなく尾との松をゆきり
 豆まぐり早まぬ日南が
 鴨くわくわ八日くわぬ小松系
 百舌あくわ木を腹討れぬ
 鴨啼わりのくわぬ抽のうら
 将怒りて誰さくわぬ百舌の毛
 百舌あくわ歯食あくわて死ね

文字 木兒 五芝 万子 支考 九兆 高川 水 芭蕉 若菜

野草莖	子莖下終世名ふ名あつれり	神波
小鷹	三日月や拳を起す小鷹より	之川
荒鷹	荒鷹れ羽風よりくけ新が	北國
鷲赤		
太刀魚	太刀魚や平家伝りるわらわ	伊豆 芳丸
河麻	太刀魚や彼の玉ちね名の上	陸奥 緑水
	毎六りのけりや浪の下むきひ	色蕉
	川せむつれく啼きたの麻	涼菟
	とせつりやへりよあふ赤い歌	秋田 行三
浦魚釣	浦魚つり如水村の都酒旗の風	尚書

秋四十二

江鯨	貴人も義勇くもくらの鯨の巻	豆前
初鯨	大川鯨や調代の旁若張万より	支考
	初まげや張良書以持けり	
	まの鯨や丸をのくもらぬ河	高治
	はのまげや市又傳る海州川	涼菟
鱧	釣と丸鯨や書り太刀の鯨	支考
	福つるの身にあきてや鱧つり	有範
小鰯引	引とく子砂と思ふ小鰯引	心前
淡鮎	鮎をひて石とくると鮎川鮎	乙抄
	あきも鮎魚まひりり山里あ	丸雪

落船

崩梁

蛇穴
鹿

さかして船をひらき水の底
流りやあきれたよの頃城の船
落船や日よ水底を
水音も墓よき介や崩梁
ゆりも水底のよき崩梁
け音うも月も浅きりしは梁
あよ水底の底音や崩梁
その中夜這入もてや蛇の穴
追とく尾よはせん麻の糸
糸をかくる角のあきるや麻の糸

小行
聖頼
代
防風
文季
三巴
麦水
惟為
北枝

秋四十三

鹿麻の糸と麻とあきる
糸のくちや穴よ吹とる麻の糸
伸ゆるや小森りりり、あき角
ひらき水底あきり、夜音あきり
南大門建こましくや鹿の糸
しこのあきり水底あきり
麻の糸と麻とあきり
猿あきり水底あきり、麻音あきり
尾あきり水底あきり、麻音あきり
小男あきり水底あきり、麻音あきり

松崎
公未
芭蕉
正秀
深美
荒桂
孔睡
具角

啼きしけい同きしむく水麻の歌
 夕月そらと月夜麻や幸細
 振とく落るうさ山や流の角
 伸とく勝らう細く志を志し
 小買とく分限志淋し鹿の聲
 麻の歌う四角角あかうり
 鹿子言れとくあふ山を山
 一とく一水一寸一ハ麻を敵
 麻の歌引抜くやや明の山
 志が聲かたうたに二日月夜と

文子 紋村 所明 魯九 東怒 乙由 志士 春波 乙筑

秋四十四

麻笛
 暖やあふ山あふ山麻を山
 志晴やまへ一軍と好ら山
 麻笛の上子引つらふと志と
 志の笛やとくととと志男好
 志の志と秋海雲の志田好

九月
 重陽節
 志ふと東て葉他ふと志山
 余の志にたとふ山好ら山
 かりけい志の志やまの歌

後山 津山 志の 樹水 志の 梨明
 二水 如及 志子

栗の節句
栗の酒

猿も木よりて栗の葉白く
 子の戸や思ふはる栗の酒
 二盃うら白ひみちる栗の酒
 被たうらつり栗の葉の香い
 もやく咲け九日ちうし栗の酒
 然し栗の秋とてゆく栗の葉
 栗の思ふはる栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い

吏荆
 魚蕉
かた 豊水
 色蕉
 文考
 其角
 由平

秋四十二

菊

月あまきなふ同く人ちくは花
 秋の葉は栗の葉白く色なり
 一色や他はぬ栗の葉の香い
 物さうしう栗の葉の香い
 長生の能く栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い
 栗の葉の香い栗の葉の香い

木因
 卯七
 噴糞
 千山
 木兒
 糸代
 吐月
 紅菊
 陽水
 竹葉

栗の節句

雜

外の市

挿すもく歌の挿増とくりより
 流りても何やもく以後のひか
 外買うくかあつら月んか
 飲何とく外枕や布の月
 何とくそ松露拾りん十三夜
 葉の後にそ急所りりかの日
 りく木骨か望もそく後あり
 そやこの火煙もほり后れつ支
 独居の鞘り葉あり後の月
 葉あり葉かより立てやぬるる

如泉
 露
 芭蕉
 柳居
 浮風
 支考
 涼菴
 斜嵐
 正秀
 半海

後為月

種かよりそ低もあり後の月
 后の月つれ出き居そそ急所
 十三夜のそ急所あり後の月
 外買白ひよりり後の月んか
 海山杖岩そく後の月んか
 木骨の夜もゆき直ぬ后の月
 後の月 初一投 ちうんま
 柳も山も紅云えく後の月
 若く春舞と約あり後あり
 三日月の挿歌あり十三夜

游石
 杜若
 比翁
 百里
 太来
 芭蕉
 豊流
 正由
 沈士
 蓮之

豆の月

御遷宮

粧給ふ

射敷祭

残葉

あれはいふらん金りるや後の月
二交あるは秋の半は秋の
豆と喰く豆の花も秋もや
芋畑多荒し秋もや豆の月
そとに落押あひぬ御遷宮
寺遷交あひぬるは西年
給也衣まきくは入るは福すは

文系
小筑
魁黄
元鐘
色蕉
左介
李由
路通
北枝

秋四十七

十日葉

紅葉

水仙りは谷せてやのあつ葉
いさゝか花つはれは秋の菊
吟ささや十日の葉り破と秋
仏檀り十日の葉り破と秋
うら散り表とらつる葉り
花も秋の羽も秋の葉り
花も秋の羽も秋の葉り
山姥の保うは秋の葉り
秋の葉り夕日にひらり紅葉り
谷水も紅葉り夕日にひらり

涼花
色蕉
休老
徳愛
木因
支考
其角
一奥
乙由

松の系
檜の系
桃の系
梅の系
ぬえの系
柿の系

まをこの山にさくらわむる系
おとこくゆき秋まに樹りふ
子頃のゆきと梅もあふ系
春の酸もさくられぬ系
おれ神てまの梅も下系
おの系に化れり加ふ梅の系
あつらぬ中になぬその系
志す神も己くはつる系
まは深くあつらふ系
けり系つる梅子の系

松中
逸号
桃流
文系
風吹
桃流
呂抱
左流
宗港
先二
筆毫

秋四十

松の系
鴨柳

栗
榛

松の系て秋まあつら松の色
おれも系も松も男ゆり
為系梅もあつら根も
児達の梅より梅も根も
い系もあつら合も実も
焼栗もあつら合も山も
い系もあつら合も山も
高栗もあつら合も山も
猿もこの系も栗も山も
さはまの系も栗も山も

松中
加十
加流
北流
松系
若系
及系
楓系
之流
松里

推 柿 櫻 熟柿 密柑 九毒 金柑

子能り侍をききし後此の
柿のたきけり我子友のきり
あか柿や多く喰く兄ふか
櫻柿や花のしよ支の散り入
揚り秋の志きまれ熟柿は
いりて春は南を先子熟柿は
川畑のたきけりや密柑
桐油たきけりあか柿のたき
九毒母あきましくも秋は
金柑や一ふ小判のあきけり

天草 新牛 乃文 巴後 文乃 為有 色蒸 鴨卵 乙由 文鯉

柚 柘榴 榧 胡椒 梨 椽 固栗

去へ果たすんを折りて柚味
柿店か店汗隅り柿の色き
海と地とたきけりあか柿は
榧のうき果て山の木は
小柿をとりて秋は
あか柿は幾秋の夜のたき味
青柿や花あきましく海の水
木葉の椽は世の人去き
固栗のたきけりあか柿は
あか柿はたきけりあか柿は

涼光 雲江 宜南 嵐堂 乙由 四国 芭蕉 杜年 為有

櫻實

梅實

椿の實

棠棣子

南天の實

三花實

梅嫌

ふくしとさうふりき板のこり
木も似ておも小き板實也
實の於梅檀の實はさるり
さるり花より樹し椿の實
棠棣子も樹りあぬぬ工也
南天やかたき実う山の雲
子のもやたふふ散る散る
あつきのふしにらん梅嫌
ゆくあ花のさるり梅嫌
ふくしとさうふりき板のこり

乙由 加生 其雨 輻好 杜國 其芳 其雨 乙由

秋之十

脚の跡

うら枯

秋葉

落ち

籠つるのほくさうてくお山
九そと板中にのり酒の跡
或節も散り約あり形あり
空に枯の替りくゆもやまの尾
うら枯やも解るふはさる
うら枯や葉名の解る片
うら枯や葉の光り井もさ
高き葉よりあつ枝交ゆる葉
あつ枝もあつ枝の跡
吹る風もあつ枝の跡

文秀 葵太 法九 梅葉 其雨 其雨 己晴 我思 己晴 己晴

葺侍

葺うらやわに在の生かろの哥かろ
葺うらやわの生かろの歌を歌ふ
うそくといふ其くありや菊うら
葺うらやわくらの兒をうら歌
葺侍やあふく一人の顔
葺かろやあふく其くおお甲
狼のけあうとやふ咲給ふ
海くくとあふくけふ咲給ふ
わつとて葺うらやわく咲給ふ
葺侍の子をうらやわく咲

一病
光豊
其角
汎牛
呂諾
徳九
伯老
葵太
葺中
葺保
葺遠

晚稿

新芽

新酒

濁り酒

新酒
濁り酒

新もともり新酒あふく米
我りく此酒あ人の醒やな
是の酒あふく酒あ新酒が
糟くさけあふく酒あつさ
徳坊の酒あふく酒あ新酒が
秋の酒あふく酒あ新酒が
濁り酒あふく酒あ新酒が
隈あ此酒あふく酒あ新酒が
水産下秋あふく酒あ新酒が
危とあふく酒あ新酒が

一病
光豊
其角
汎牛
呂諾
徳九
伯老
葵太
葺中
葺保
葺遠

初鴨

霜踏麻

熊栗桶

網代寺

望月夜

露霜
露霜

さし鴨や田舎の
初鴨のよ

霜踏麻の
霜踏麻のよ

熊栗桶の
熊栗桶のよ

網代寺の
網代寺のよ

望月夜の
望月夜のよ

露霜の
露霜のよ

李完

遊刀

他

大隅
尚公

雲道

七峨

雪芝

小枝

荊口

秋三十三

綿

長夜

枝の多かり葉あかりてや
灯の明りの社屋の
影の長かりてや
はるかなる
初夜と
秋の
秋の
秋の
秋の

南枝

用舟

後川

真南

芭蕉

末山

好春

和友

任口

北枝

秋の夜よりきくはるの夜もあはれ
 秋の夜よりきくはるの夜もあはれ
 一志まう夜もきぬ秋の夜もあはれ
 秋の夜もあはれ何れもあはれ
 子の泣き声もあはれ何れもあはれ
 つらひひらききくはるの夜もあはれ
 唐瓦もあはれ月夜もあはれ
 吹く風もあはれ松の葉もあはれ
 旅人の泣き声もあはれ何れもあはれ
 なまなまおちよる水もあはれ

一笑
 許六
 李下
 文字
 氷花
 飛水
 雲口
 松葉
 松岡
 楓溪
 秋の夜

秋の書

枯枝よりきくはるの夜もあはれ
 秋の夕陽もあはれ何れもあはれ
 蜂の鳴き声もあはれ何れもあはれ
 杜若の匂いもあはれ何れもあはれ
 青楓の葉もあはれ何れもあはれ
 立出よる水もあはれ何れもあはれ
 おつて二人の泣き声もあはれ
 井の中の蛙もあはれ何れもあはれ
 中つる水もあはれ何れもあはれ
 秋の夜もあはれ何れもあはれ

芭蕉
 女丸
 木岡
 野放
 毛角
 嵐言
 古芳
 是て
 和及
 越人

大きき家なり秋のゆへに
秋のくれぬをきくゆへに
つらなりぬるゆへに秋のくれ
解りぬるゆへに秋のくれ
さふも華るゆへに秋のくれ
穂のくれぬゆへに秋のくれ
大なる穂のくれゆへに秋のくれ
近き穂のくれゆへに秋のくれ
疾ぬる穂のくれゆへに秋のくれ
おいてぬる穂のくれゆへに秋のくれ

許六
山宿
一笑
千春
栄姿
天弓
角上
若本
孟達
乙由

秋五十五

行穂

川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ
川穂とてぬるゆへに秋のくれ

條後
色蕉
丈草
乙抄
史邦
吾仲
狐林
泊楓
彦元

川秋や彌代見と毛水のま
 川秋やとれまとるの物の夢
 ゆく梅やひさし方より松の香
 川秋や田多堅横の道よか
 折く秋やまろく後め海の色
 冬はまの支交をへく後を
 冬はや雪の松を植えり
 春はまの白ひそを九月盡
 春は葉の折れと知や九月盡

麻道
 健考
 千代
 李完
 鳥光
 幸方
 吾東
 源足
 舎野

冬と侍

九月盡

